日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第 120 号　2009 年 12 月

シェイクスピアの『ジョン王』における「利益」("commodity") を乗り越える普遍的価値の模索

井　上　准　治

はじめに

開幕まもなく，イングランドの宮廷で，ジョン王を「仮の王」呼ばわりしながら，アーサーの正当な権利擁護のためにその領土引渡しを要求するというフランス王フィリップ二世のメッセージがフランス大使の口から伝えられる．獅子心王と呼ばれた亡きリチャード一世の相続争いにフランスが介入してきて，英仏間で領土覇権をめぐる戦いが始まるのである．作品では触れられていない歴史的な経緯としては，プランタジネット朝の祖であるヘンリー二世には早世したウィリアムの下に四人の男子が生まれたが，次男ヘンリー（「若ヘンリー」と呼ばれた）をはじめ，それぞれが領土分配をめぐって父に楯突いたり，兄弟同士で反目して，フランス王フィリップも交えて時に合従連衡をしながら争いを繰り返した．ヘンリー二世の後を継いだ三男リチャード一世が，十字軍遠征をはじめ内外の戦いに明け暮れながら最後に流れ矢にあたって死に，彼には子がいなかったため，不仲ではあったものの末弟のジョンに遺言で王位を継承させたと言われている．しかし，リチャード一世のすぐ下の弟であったブルターニュ公ジェフリーもこのときにはすでに亡くなっており，その子アーサーに王位継承の優先権を主張するブルターニュ公未亡人コンスタンスがフランス王に支援を求め，今回の事態に至ったということになっている．ただし，ノルマンジー公ウィリアム（フランス名ギョーム）による，いわゆるノルマンコンクエスト（1066）からまだ 140 年ぐらいしか経っていないこの時代には，イングランド人というよりフランス人の血族同士による権力争いが展開されたのにすぎないというのが実態である．

しかしそれからおよそ 400 年後のエリザベス朝では絶対王政のもとで中央集権化が進むなか，イングランド人としてのアイデンティティが醸成されていった．とりわけ，1588 年のスペイン無敵艦隊を打ち破ったアルマダ海戦前後の 10 数年間は女王の命でホリンシェッドの二巻本『イングランド，スコットランド，アイルランド年代記』（以後『年代記』とする(1)）などの歴史書が編纂されたりしたこともあり，自国の歴史への関心が高まった．アルマダ海戦とは，16 世紀後半のヨーロッパにおいてカトリックとプロテスタントとの抗争が激化するなか，スペインとイ

ングランドが北ヨーロッパと大西洋の二方面でことごとくその利害が衝突し，1587 年 2 月国教会擁護のエリザベス一世（1533－1603）が，スペインと組んで自分の暗殺を図ったとして，カトリックのスコットランド女王メアリー・スチュアートを処刑したことで，スペインのフェリペ二世がイングランド征圧を決意して無敵を誇った大艦隊を派遣するものの，時ならぬ大嵐もわざわいして敗北の屈辱を味わったというものであり，イングランドにとっては自信と誇りを謳歌すべく大勝利として喧伝するものであった．三幕四場のフランス王がアンジェにおける戦いに敗れたことを確認するためにまったく唐突に自軍の艦隊（armada）の嵐による不運な壊滅の件を持ち出している（3.4.1－3）が，これがスペイン無敵艦隊の敗北への言及であるのは間違いない．

エリザベス自身がその王位継承を巡る争いの渦中にあって投獄の憂き目も経験し，父ヘンリー八世同様ローマから破門（1570）されたりしながらも 1572 年から 10 年間ぐらいは比較的安定した治世を進めていた．しかしその後，女王もすでに 50 歳を超えながらその後継者問題の展望が見えないなか，新旧両教の国教会に対するさまざまな策動が目立ちはじめ，またアルマダには勝利したもののスペインとの戦いは長期化し，戦費調達のための増税などによる不満が庶民だけでなく有力貴族にまでたまってきて，時には暴動や陰謀や反乱にまで発展することもあった．したがって，この作品が書かれた 1590 年代半ばは女王の権力強化が，例えば，「歴史」ブームがおこされたり，反乱の目を摘むための説教集が教会のミサでさかんに朗誦されたり[2]，あるいは陰謀を未然に防ぐ監視組織が活用されたり，というようにさまざまなレベルで計られたと思われる．

この作品は主としてホリンシェッドの『年代記』が種本とされ，シェイクスピアも当局の「公式見解」的なものをふまえて描いたであろうが，しかしそれから一定距離を置いて芸術的に形象化したことも確かである．この点を主要登場人物のダイナミックな関係の分析を通して明らかにすることが本稿の目的である．ところで，同時代に作者不詳の『ジョン王の乱世』という劇が存在しており，これも種本，あるいはシェイクスピアの試作品ではないかなどの議論[3]はなおあるが，このようなテキスト批評問題は本稿の目的ではないので対象にしないことにする．

エリザベス女王

一幕一場が開いてすぐイングランド王位の正当性を巡って英仏間の戦争必至の状況が明らかになるが，皇太后のエリナーが，アーサーの母親のコンスタンスに対抗心を剥き出しにしながら，ジョン王にその権利よりむしろ兵力を頼りにするよう傍白している．

王　われわれには強大な兵力，正当な権利があります．
皇太后　（王に傍白）おまえの権利より強大な兵力のほうを頼みとなさい，
　でないと，おまえにも私にも不利なことになります．
　これは私の良心がおまえの耳にだけそってささやくことば，
　だれにもきかせてはなりません，天とおまえと私のほかは．　（1.1.39－43）

宮廷侍女であったアン・ブーリンが生母であるエリザベス（その出産の年にアンがヘンリー八世の二番目の王妃として正式に結婚）が私生児として王位継承の資格に疑問を投げかけられることもある一方，スコットランドのメアリー女王にもその父方の祖母がチューダー朝の祖であるヘンリー七世の王女マーガレットであることからイングランド王位継承権があったため，18 年以上のイングランド滞在中たびたびエリザベス廃位の陰謀に関わったとされ，その存在が危険視されてやがてエリザベスの命令で処刑される．このことを背景にしてみると，皇太后の傍白からは，単なる嫁と姑のいさかいの域を越えて，生々しい権力闘争の相が垣間見えてくる．シェイクスピアが参照したエリザベス朝の歴史家たちにジョンの王位継承を疑う記述はなく，また，史実からみてもリチャード一世が遺言で王位を彼に託しているが，一方でフランス側にはアーサーに正当な継承権を認める考え方があったこともエリザベス朝の人たちには良く知られていたらしい(4)．シェイクスピアはあえてこのフランス側の見方をふまえて皇太后にアクチュアルな政治学（パワー・ポリティックス）を語らせて，彼の生きている現実世界をここに投影させていると思われる．

この傍白の直後，ロバート・フォーコンブリッジとその異父兄である私生児フィリップが登場し，遺産相続訴訟が王の前に提出される．それは要するに，長男フィリップは，父が軍務で長期不在中に屋敷に滞在していた獅子心王が母を孕ませた子であって，実子ではないということを，亡きサー・ロバート・フォーコンブリッジが，次男のロバートに告白し，さらに所有する土地すべてをこの嫡子である次男に譲るという遺言を残したので，ロバートが長兄に対して相続財産をそっくり渡すよう要求するというものである．これは王位継承を巡るプランタジネット家の争いの明らかなパロディであると考えられる．しかも風刺を機能とするパロディらしく，田舎騎士の家庭内騒動は，一方がその家庭内の枠を突き抜ける形で全面的に譲歩して，あっけなく平和裏に解決される．リチャード一世の弟であるジョン王も，その母親である皇太后エリナーも，フィリップに明白な獅子心王の面影を認めて，彼を私生児ながら身内に迎え入れようとする．フィリップも，世に出るチャンスとあっさり財産を全部弟に譲って皇太后の提案を受け入れ，王からプランタジネット家の勲爵士サー・リチャードを拝命し，訴訟そのものがなかったものとなる．

その後一人になった私生児は，自分の地位が思いもかけず急上昇したことで予想される胡麻擂り連中のへつらいにまんざらではない気分にすこしばかり酔いながらも，あくまで私生児としての立場を自覚しながら，日のあたる世界に意欲満万で出て行く決意を独白する．

これがお偉い閣下たちの社交ってやつだ，
おれのような高きを望む精神にはピッタリだ．
多少はお追従の気味がないと，この世にあっては
受け入れられず，いわば時代の私生児になるしかない．
ましておれは，その気味があろうとなかろうと，
私生児だ，だからおれは，服装，外見，紋章といった
外なる飾りで見せかけるだけでなく，内なる心の奥底から，

時代の口にあうような甘い，甘い毒を提供する義務がある．
人をだますためにそれを使う気はおれにはない，だが
人にだまされないために習い覚えておきたい，甘いことばが
出世の階段をひたのぼるおれにふりまかれるだろうからな．　(1.1.205－216)[5]

わずか 2 歳のとき母のアンが処刑され，私生児として過ごさざるを得なかったエリザベスが，ようやく 11 歳で王位継承権を持つ王女として復権できたものの，ロンドン塔に幽閉される憂き目も味わい，二人の異母兄姉王の死後，25 歳の 1558 年にエリザベス一世として即位，その後 45 年間に渡り一度も結婚することなく波瀾に満ちた生涯を過ごした．レスター伯やエセックス伯やローリー卿などとの恋愛関係も含めて，さまざまな思惑のもと次から次へと近づく者たちに対応するのは並大抵の労苦ではなかったであろう．もののふのようなリーダーシップを発揮するだけでなく，時には未婚であることが外交上も内政面でも大きな武器になったであろう．引用した私生児の台詞の特に後半 6 行は，まさにエリザベス女王の生き様を想わせるものである．

道化としての私生児

劇中の私生児は，しかしながら，「人にだまされないために習い覚えておこう」として甘いことばを吐くことはなく，むしろ身軽に道化のような第三者的立場に身を置いて，そのようなへつらいの態度を批判する．劇の前半における彼の役割は，この道化的機能でもって，うわべの大儀や正義といったものを相対化することである．彼は，獅子心王を倒した象徴としての獅子の毛皮を身に着けて伯父を殺した罪滅ぼしと義勇心からアーサーの支援に駆けつけたとするオーストリア公の本当は臆病者で追従者の本質を一瞬に見破り，その痛烈な舌鋒の矛先をこの男に執拗に向けるのに容赦しない．とりあえず，「服装，外見，紋章といった外なる飾りで見せかけた」男が，格好のターゲットとして，目の前に現れたのである．

さらに彼の皮肉な矛先は，アンジェ市城門前で市民の支持を取りつけようと張り合うジョン王とフランス王のことばを見事に無力化する．二人の王の空疎な常套句に絶妙のタイミングで自らを卑下することばを割り込ませて，彼ら二人を公平にからかう．

王　イギリス王の王冠も王の証明にはならぬというのか？
　　であればやむをえぬ，この場に証人を呼び出すまでだ，
　　勇気にあふれたイギリス生まれの三万の精鋭が―
私生児　私生児，その他をひっくるめて―
王　いのちをかけて私の権利を立証してくれるだろう．
フランス王　数においても生まれにおいてもそれに劣らぬ勇士たちが―
私生児　同じく私生児をひっくるめて―

フランス王　彼の主張を否定すべくその面前に立ちはだかっておる．　(2.1.273－280)

また戦いに臨んで呼びかけられる守護聖人でさえ彼にとっては卑小な存在である．両王が戦いでいずれが正当な権利を有するか決着しようとなったとき，私生児は「龍を殴りつけて以来，飲み屋の看板になって馬の背に乗っておられるイギリスの守護者聖ジョージ」に剣術の教えを請うというのである．

そして彼は，城門の胸壁上で洞ヶ峠を決め込んで両軍優劣つかないまま戦闘の第一ラウンドが終わる様子を眺めていた市民たちの，なおも頑なに門を閉じたまま動かない姿を見て，まずはこの城を両軍が一緒になって砲撃で叩き壊して，それからもう一度分かれて戦闘再開するという「妙案」を出す．まるで芝居見物でもしているような市民たちの態度に腹を立てての提案に，二人の王はすぐ同意し，さらにジョン王は西から砲撃し，オーストリア公は北から，フランス王は南から砲撃しようということになる．結局仏軍側は南北から同士討ちをしてしまうことに私生児以外は気づかない．このように戦術があまりにもお粗末であり，また，「城壁など跡形もなくなった焼け野原にしてしまう」ので，アンジェという小さな町をいずれが取るかということは，もはやどうでもよくなって，そもそもこの戦い自体に意味があるのかという疑問すら王たちには沸かない．この無意味さに気づかないということこそが私生児の提起するアイロニーである．

しかし市民たちにとっては，こんな腹立ち紛れの無謀な攻撃は無意味どころか，きわめて恐ろしい結果をもたらすものである．したがって，英仏いずれにしろ強者に従うしか生き延びる手段を持たないちっぽけな町が，日和見を貫いてきたが，その日和見主義自体が許されなくなった今，町の防衛のために唯一できることとして，代表格の市民１がジョン王の姪のブランシュとフランス皇太子ルイスの結婚による和睦提案をするのである．しかしこれでは王位継承争いそのものを道化的に茶化す私生児の面目丸つぶれである．

市民の提案にまず皇太后が賛意を示し，ルイスとブランシュはともに相手をよきパートナーと認め，ジョン王とフランス王も，持参金まで話題にして，若き二人の結婚に満足の意を表す．相変わらず機をうかがうに敏なオーストリア公も祝福のバスに乗り遅れることはない．ジョン王が，とりあえずアーサーには形ばかりの爵位を与え，彼をこの町の領主に任ずるということでこの場にいない失意のコンスタンスを説得できるだろうと言って，私生児一人を残して，一同市内で行う婚礼の儀式に急ぐ．

何の後ろめたさも感じることなくこれほど簡単に前言をひっくり返す王たちに，私生児が憤懣をぶちまけて劇中最長の 38 行にもなる独白をする．彼に言わせると，結局のところ人を心変わりさせるのは「利益」("commodity"[(6)]) であって，それは，王，乞食，老人，若者，娘を問わず，見さかいなしにだれもかもに取り入って世のなかをねじ曲げる．彼は延々とこの「利益」なるものを擬人化して罵り続けるが，しかし，独白の残り三分の１ぐらいのところで，我に返って次のように言う．

だがどうしておれは，利益ってやつを罵るんだ？
おれがまだやつに言い寄られたことがないからだ．
やつの美しい天使である金貨がおれの手に口づけするとき，
指を握りしめてそれを拒否する力があるからではない，
この手がそういう誘惑にあったためしがないので，
貧しい乞食が金持ちに八つ当たりするように罵るのだ．
ま，おれが乞食でいるあいだは罵り続け，
金持ちであること以外この世に罪はないと言ってやろう，
そしておれが金持ちになったら，美徳そのものの顔をして，
乞食であること以外この世に悪徳はないと言ってやろう．
国王たちでさえ利益のためには誓約を破る世のなかだ，
利益こそおれの君主，おれが崇拝するのはおまえだ！　(2.1.587－598)

私生児は，人のためや国家のためなどと偽善ぶっている世のなかの本音を暴露すべく，自らが何よりも利益第一の「悪魔崇拝者」になることを宣言するのである．

その後，気持を逆なでするようにフランス王が皇太子の婚礼にちなんでその日を聖なる祝日に制定すると聞いて，コンスタンスが激怒し，そこになだめに入ったオーストリア公に，強い方にばかり味方して強がる卑劣漢と，悪罵を浴びせる．これにオーストリア公が反論しようとすると，私生児が，以前王たちにしたように，そのことば尻に絶妙のタイミングで彼女の締めくくりの罵りことばを割り込ませて，そのことばの軽さをからかう．まだまだ彼の道化ぶりは健在である．

するとそこへ法王の全権大使であるパンダルフがやって来て，またまた風向きが逆転する．彼は，バチカンが選任したカンタベリー大司教を承認しないことを問題にして，ジョン王にその理由の返答を要求するというのである．これに対して，ジョン王は，「この世のいかなる名をもってしても，神聖な国王から／思うままに返答を引き出すよう尋問することはできぬぞ！」(3.1.73－74) ときっぱり返答を拒否し，さらに，「わが国において／イタリアの神父が税金を徴収することは二度と許さぬ，／神のもとにあっては，あくまで私が最高の主権者だ，／したがって，神のもとにあって私が治めている国においては／この私が，私のみが，最高の主権を保有しているのだ，／いかなる人間の助力も借りる必要はない．帰って／法王にそう伝えるがいい，彼にも，彼が簒奪している／その権威にも，なんら気がねするにはおよばぬ．」(3.1.79－86) と断固とした調子で語る．彼の主張は，王の教会権力からの独立と国民の絶対的支配の理論的根拠となったいわゆる王権神授説に基づいていると考えられる．これは，16－17 世紀のヨーロッパにおける絶対王政を支えるイデオロギーであり，イングランドでは聖俗両方の長となるエリザベス一世治世を中心にしたチューダー朝の政治思想であった．絶対王政は，文字通り堅固絶対であるように見えて，実はエンクロージャーによる経済構造そのものの変化が進行するなかで，従来の封建的社会関係が崩れ，新たな社会的諸勢力の拮抗，妥協のもとに生まれたものにすぎないゆえに，そ

れを支えるための神話[7]や歴史やイデオロギーが必要であったと思われる．したがって，あえて神のもとにある君主の主権が主張されのである．

一度は英仏間の利害による和睦が成立するかに見えたが，パンダルフが，ローマへの不服従をあくまで貫こうとするジョン王に破門を宣言し，フランス王にも神の呪いを受けたくなければこの異端者と手を切るようにと迫り，結局戦闘再開ということになってしまう．この間，フランス皇太子は，ついさきほどブランシュに愛を誓って結婚という形で両国の敵対関係解消に貢献しようとしたばかりなのに，どちらにも味方できないジレンマに苦悩する新妻を無視して，法王代理の脅しに慌てて父に英王と縁を切るよう求め，また一度はアーサーの王位継承の可能性がなくなって絶望していたコンスタンスが，一縷の望みをこの戦闘再開にかけようと，この段階では比較的単純な皇太子をあと押ししながら，ブランシュのことばを悪魔の誘惑とまで呼んで，必死にフランス王説得にかかる．彼女は，教会の呪いというよりむしろ自分の呪いを込めて，つまりあくまで自らの利害を賭けて「平和より戦争」と叫ぶのである．しかしパンダルフが代弁する教会の呪いなるものも実は，ローマの既得権益確保のためという，極めて世俗的なものにすぎない．オーストリア公は，相変わらずその日和見主義の本領を発揮して，急いでフランス王説得に加わる．そこでまたこの男の御都合主義を私生児が毒気のあることばで茶化し続ける．そしてやがて戦闘が終結し，オーストリア公の首を持って登場した私生児は，これ見よがしにそれを放り投げて，ついに二人の間のどたばた調バーレスク・ショーをグロテスクに終える．

マキアベリストに変貌するフランス皇太子

私生児が言うように，「利益」はだれにでも甘いことばで囁きかけるもので，フランス王やオーストリア公にとって代わって，後半でそれを原理に行動するのはフランス皇太子である．海上の嵐で艦隊がちりぢりになり，アンジェの町は奪われ，アーサーも捕らえられて，大陸での戦闘がフランス側の敗北に終わり，息子を失ったことにただ悲嘆に暮れるコンスタンスの愁嘆場を見た後，彼も人生そのものへの絶望を口にする．これに対してパンダルフが，ピンチをチャンスに変える策を授ける．その内容はおよそ次のようになる．①アーサーがジョンに捕らえられたことは嘆くべきことではない．不当な手で奪った王笏は，手に入れたときと同じく，それを持ち続けるにも暴力をもってせねばならない．つまり，ジョンが立つためにはアーサーは倒れなければならない．②アーサーが倒れれば，皇太子の妻であるブランシュ夫人の権利によって，アーサーの要求した権利すべてを要求できる．③仮にジョンがアーサーを監禁するだけにしておくとしても，皇太子が兵を進めると聞けば，すぐ彼を殺すだろう．そうなれば全国民の心は彼から離反し，反乱が起きる．④動乱の気配はすでにあり，フォーコンブリッジが教会の金を奪って恨みを買っている．民衆の不平不満を利用すれば何でもできる．今こそイングランドへ行くべきである．⑤フランス王はこちらで説得する．

皇太子は，パンダルフが言うように，その「分別は血のように若く」(3.4.125)，「すれっから

しの世にあって，ういういしい人」(3.4.145) であったので，このリアル・ポロティックスの講義を受けて，「強烈な理由は壮烈な行動を生むもの」(3.4.182) と言って俄か仕立てのマキアベリストになった．そしてすぐイングランドに進攻して瞬く間に支配権を拡張していく．ドーヴァーの城を除いてケント全州が降伏し，ロンドンもまるで客をもてなすがごとくその軍勢を受け入れ，多くの貴族諸侯たちも忠勤を誓うことになる．

有力貴族たちの不平不満が蓄積されていたことは言及されているが，その具体的中身は描かれていない．ホリンシェッドは，彼らの反乱の原因として，ジョン王がアーサーの目を抜くよう部下へ指示したこととともに，戦費やブランシュの持参金（3 万マルク）調達のための重税策＝王室用臨時特別税（subsidy）の問題もあげている[8]．この重税策は現実の反乱の大きな原因となり，やがて 1215 年のマグナ・カルタ（Magna Carta）起草，署名へと発展していくものと考えられる．しかしシェイクスピアはこの問題に一切触れることなく，もっぱら王によるアーサー殺害への反感が彼らを離反行動に駆りたてるものとして描いている．謀反を決意した三人の有力貴族がセント・エドマンズベリーに陣を構えているフランス皇太子に忠誠を誓うが，その代表格のソールズベリーが苦悩の心情（5.2.9－39）を述べている．それは要するに，「ここまで進んだ時代の病弊を直すには祖国の敵陣に身を投じるのもやむをえないが，その不名誉を思うと泣かずにはおれない．できれば両国が和解できればよいのだが.」というものである．皇太子もこの涙にあふれた高潔なジレンマに深く感銘したことばを返してみせるが，ちょうどそのときパンダルフが登場して，ジョン王がローマと和解したので，フランス側も軍を引いてほしいと要請する．皇太子はこの要請を断固はねつける．かつて彼から講義を受けて俄か仕立てのマキアベリストになった皇太子は，今や，したたかな本物のマキアベリストになった．みすみす大きな利益が転がり込んでくる有利な状況を逃す手はない．したがって，ソールズベリーが痛切に述べたナイーブな心情は，皇太子のリアルポリティックスの前には何の意味も持たない．実は，フランス軍幹部の間で，この謀反三人組を勝利確定後処刑することが皇太子の発案ですでに決まっていたのである．

アーサーの生への執着

自嘲と諧謔を交えて「利益」を罵りながら「悪魔崇拝者」宣言をした私生児の不在中に，われわれの前に強い印象を残すのはアーサーである．彼は必死に生きようとし，その努力が実ったと思ったとき思いがけない形の死を迎える．

常に母親に従い，自分の意思を持たない人形のような以前の姿とは打って変わって，四幕一場のアーサーは，死に直面しながら自ら生きることに執着する，極めて雄弁な少年である．両目を熱い鉄串で焼き潰して殺せという令状を執行すべく準備を整えたヒューバートは，「なんだか暗い顔をしているね」と少年から表情の変化を指摘される．その直前のヒューバートと死刑執行人たちとのやり取りを見せられた観客には，この台詞は，相手の気持を無意識に感じ取ったかのように，劇的アイロニーとして機能するだろう．そしてアーサーは自分の暗い悲しい気持について

語る．

ぼく以外に暗い悲しい気持をもつ人なんていないはずだ．
と言っても，ぼくがフランスにいたとき，若い紳士たちは
まるで夜のように悲しそうな顔をしていたものだけど，
それもただ，気まぐれな見栄のために．ぼくだって
この牢獄から出してもらい，羊飼いにでもなれたら，
一日じゅう明るい気持でいられると思うがなあ．
いや，ここにいたってそうなれるよ，叔父上が
これ以上ひどいことをなさる心配さえながったら．
叔父上はぼくをこわがり，ぼくは叔父上をこわがっている．
ぼくがジェフリーの息子だってことは，ぼくのせい？
そうじゃないだろう？　おまえの息子だったらよかった．
そしたらぼくをかわいがってくれたろうからね，ヒューバート．　(4.1.13－24)

フランスにいたとき，すなわち，イングランド王位継承を巡る争いの中，叔父ジョンの対抗馬としてフランスの支援のもと御輿に担がれ戦場に赴いていたとき，まわりの若い紳士たちは，幼い自分に親しげに接してくれるどころか，むしろよそよそしさを装ったと言っている．アーサーはこれまで単なる戦いの旗印として，そして気位の高い未亡人である母親コンスタンスの希望と嘆きの対象として，ほとんど生きた個性を感じさせるものではなかったが，実は驚くべき感受性の強い少年であることがわかる．

貴い身分を捨て羊飼いの生活を望むと言っている．まるで悟ったような夢想[9]を述べるが，しかしすぐ現実に戻って，今の自分の置かれている危険な状況に対する的確な認識を示す．牢獄であるこの城に幽閉されているだけでなく，命の危険が迫っていることを感知しているのである．そして彼は，母があれほどこだわったプランタジネット家の血を捨て，世話役兼監視人であるヒューバートの息子になりたいと言う．羊飼いの生活以上に非現実的であるが，本人を目の前にしてのこのことばは，情緒的に，極めて現実的な説得力を持つ．これを聞いたヒューバートが傍白するように，「この無邪気な口ぶりで死んでいたはずの慈悲心が生き返りそう」である．

さらにアーサーは，「無邪気に」彼の青白い顔を引き合いにして，「おまえがちょっとした病気にかかったらいいな，／そしたら一晩じゅう看病してあげられるもの．ぼくは，／おまえがかわいがってくれる以上に，おまえが好きなんだ．」(4.1.29－31) とたたみかける．これはまるで恋する人への愛の告白のようなものである．このことばで胸を押しつぶされそうになりながらも，何とかヒューバートは意を決して例の令状を見せる．

するとアーサーは，将来の約束に基づく愛の告白ではなく，過去の実績を示して令状の執行を阻止しようとする．以前ヒューバートが頭痛に襲われた際いかに本気になって手厚く看病したか

を，道具立てやことばかけまで交えて具体的に，しかも簡潔明瞭に，再現してみせる．まるである種の道徳劇の演者のようである．そしてそれでも焼いた鉄串で目を潰すと誓ったんだと言われると，今度はその鉄と火の擬人化による説得を試みる．この少年はここではコンシートと呼ばれる隠喩を使用したイマジネーションを操る詩人になる．

ここに至って，ヒューバートが，鉄串や綱などをもって隠れていた死刑執行人たちを呼び出し，アーサーを縛り付けるよう命令すると，少年は必死に抵抗して，ヒューバートに彼らを追い出してくれるよう懇願する．今まで見たこともない新手の二人は何としてもいなくなってもらわなければならない．このときも少年は，「動かない石」や「おとなしい羊」の隠喩を使って，自分の方からじっとしているから追い出してと言っているが，さらに懇願の譲歩条件として「一言もしゃべらない，怒ったように鉄串をにらみつけもしない」(4.1.80) と提案している．これを受けてヒューバートが死刑執行人たちに奥へ行くよう命じると，彼らは自分たちの手を下さずに済んで助かったと言ってそそくさと退場するが，そのことばを聞いたアーサーは，顔つきは怖かったが本当は味方であった彼らを呼び戻してと願い，そのやさしい心がヒューバートにもやさしさを与えてくれるかもしれないと言う．ヒューバート自身もその顔は強面であることから，この少年の一瞬の機会をとらえて相手の心を揺さぶる話術の巧みさは，やはり脱帽ものである．

二人になって，やはり目を潰す以外にしょうがないと言う相手に対して，少年はなおもほんの小さなごみでも入った目の痛みに想いを及ぶよう訴える．だれでも一度は経験したことのある，したがってたちまち共感できる事柄を提示して，自分の土俵に引き込むのである．

一言もしゃべらないから死刑執行人たちを追い出してと言っていたのにしゃべり続けるアーサーに，たまらずヒューバートは約束どおり黙るようにと言うが，少年の舌はますます滑らかに動く．「舌を切ってもいい，目を助けてくれるなら」と哀願し，そして「ぼくの目を助けて，いつまでもおまえを見るためだけのためでもいいから．」と，またしても愛の告白のような言い方をする．かつてフランス皇太子は，一時的な英仏和睦のための政略結婚を成立させる際にジョン王の姪であるスペイン王女ブランシュへの愛の告白をしたとき，恋人の目の中に自分の影が映るのを認め，それを愛するという，宮廷恋愛の稚拙な常套表現を私生児に揶揄されていたが（2.1.496－509）[10]，アーサーの目をモチーフにした「愛の表現」の方がはるかにレベルが高い．

そして今は冷えてしまった鉄串を指して，「ぼくを不当に傷つけるためにおまえが使おうとするものは／みんな，その仕事をいやがっている．おまえだけだよ，／無慈悲なのは，慈悲芯をもたないことで有名な／恐ろしい火や鉄さえ，あわれみを見せてくれているのに！」(4.1.117－120) と言われて，もはやヒューバートに自分に与えられた恐ろしい任務を遂行する気力は残っていない．彼はそのことを明言し，安堵と感謝のことばを返そうとするアーサーに，さらに二度も黙るように言って，彼を助けたために自分の身に振りかかるかもしれない危険についての覚悟を語って，ようやくこの場が終わる．

まだわずか 10 歳ぐらいの[11]少年は，以前には思いもよらないほどの生への執着を示し，自分の置かれている状況に対して正確な認識を持ち，時にはあどけなさで大人の保護本能（擬似父子

関係を創出して）をくすぐり，時にはコンシートを巧みに操る天才的な詩人になり，また時には愛を表現する恋人になる．この場のアーサーの雄弁さは，しかしながら，その台詞の質だけでなく量からもわかる．四幕一場は全部で 133 行から成っているが，そのうち最初の 7 行は，ヒューバートの死刑執行人に対するアーサー処刑の段取りの説明が 5 行とそれに続いて彼と死刑執行人 1 の受け答えの 2 行であり，さらに少しあとでヒューバートが発する実行命令が 2 行，そして，その後彼らの任務解任命令とそれに対する死刑執行人 1 による安堵の応答の 2 行があり，これらの合計 11 行を除くと，あとの 122 行はヒューバートとアーサーの間で交わされることばのバトルと言ってもいいようなやり取りである．しかし実際は，ヒューバートの台詞は萎えかねない気持を奮い立たせる心情吐露の傍白が二箇所で計 8 行あり，アーサーとの議論では，最後に譲歩してしまうところでようやく 4 行と 6 行の台詞があるものの，ほとんどの場合は 1〜2 行で終り，しかも数個所は二人の台詞が 1 行を共有する形になっていて，これを加えても合計で 25 行．一方，アーサーは単純な挨拶や共有形も入れると，合計で 101 行，何度も黙るように言われようとも，淀みなく喋りまくっている．焼き串で両目を焼かれるという究極の具体的な死の恐怖の中で，ほとんどありえないような臨機応変な態度やことばの応酬には，もはやだれも太刀打ちできない．

この直前の三幕四場でフランス側が決定的な敗北を喫して落ちこむなか，とりわけアーサーまで捕らえられたことに母親のコンスタンスは，もはや絶望の淵から這い上がるすべを失い，パセティックな感情を激しくぶつけていた．

死よ，ああ，やさしい，愛らしい，死よ！
かぐわしい悪臭よ！　すこやかな腐敗よ！
永遠に続く夜の寝床から起き出してきておくれ，
繁栄が憎み，恐れるおまえよ，そうしたら
私はおまえの忌まわしい骨に口づけしよう，
そしておまえの顔のうつろな穴に私の目を入れよう，
そしておまえの居候である蛆虫を私の指にからませよう，
そして汚らわしい塵芥で息の通う私の口をふさごう，
そしておまえと同じようにおぞましい化け物になろう．
さあ，歯をむいておくれ，私はそれをほほえみと思い，
妻としておまえに口づけしよう，不幸の恋人よ，さあ，
私のところへきておくれ！　(3.4.25−36)

これは，死神とのエロティックな交わりをひたすら求めるような，閉ざされた官能世界であり，もはや悲しみというより，むしろ狂気の沙汰である．彼女は，フランス王から「もうお黙りなさい」とたしなめられても尚も延々と悲嘆のことばを繰出し，わが子の惨めな死を予感して自らの死を願うばかりである．かくして死の恐怖が迫るなか何度も黙るように言われてもしゃべり続け

て自らの助命を請うアーサーの生への執着は，彼女の死への執着と対照されて，一層切実に感じられる．

ところで，この作品の種本であるホリンシェッドの『年代記』によると，「ヒューバートは，アーサーの懸命な助命のことばを聞き，また，王が愚かな激情に駆られて命令を下したのであり，やがて後悔されるだろう，と考え，さらに，陛下へ降りかかるかもしれない不名誉について進言することで感謝されこそすれ，不愉快に思われることはないだろうと確信してアーサーを救うことにした．それで，ヒューバートは，さしあたって王の気持を満足させるため，またブリトン人の怒りを静めるため，王の命令は遂行され，アーサーは悲嘆のなか命をなくしたというううわさを広めさせた．このうわさはたちまち（15 日で）英仏両国に広まった．」[12] シェイクスピアは，ヒューバートの王への配慮などの部分を除いて，このアーサーの「懸命な助命」のみをまさにことばのバトルとして提示して，少年の生へのただならぬ執着が功を奏して忠実な家臣の頑固な心を動かす様を見事に劇化している．

アーサーの死の謎

四幕三場の最初のところで，アーサーが，逃げようと試みて城壁から飛び降りるが，石畳に激突してあえなく死ぬ．このとき，彼は水夫のいでたちであるが，この服装は同時期に書かれた『ジョン王の乱世』にも言及されていない（ただし，ホリンシェッドがアーサーはフランスの城から脱獄してセーヌ川に飛びこみ溺れ死んだという説を紹介しており[13]，そこからの類推はやや苦しいが可能かもしれない）シェイクスピア独自のものである．ここにいくつかの問題がある．まず，なぜこのような身なりなのか？その台詞にあるように，「誰にも知られないように人目をごまかす」(4.3.4) ための変装であるなら，それなりの王子の身なりを捨て，ごく一般的で質素な町人の少年の服装を身につけるのが自然であるのに，水夫の格好こそがそれにふさわしいということ，つまり，それで辺りをうろついていても誰からも咎められることのないありきたりの風体が水夫だということになる．しかし，ずっと幽閉されていた少年に「その辺り」についての知識があったとは思えないし，もし仮にフランスから拉致されてここに収容される際に「その辺り」を垣間見る機会があったとしても，その偽装を自分で用意できたであろうか？質素な町人服でさえ牢獄でもある城から一人で脱出するときに手に入れるのは困難だろう．まして自らの好みで水夫に変装するなぞありえない．すると，誰かにこの服装を用意されたと考えるのが妥当ではないだろうか．

この城の場所はどこなのかについては一切明らかではない．史実として確定されていないこともあって，シェイクスピア自身も特定することに興味なさそうである．しかし，推測は可能である．この少しあとで，ヒューバートが「元気なアーサーとわかれてまだ 1 時間もたっていない」(4.3.104) と言っているが，彼が宮殿の王にアーサーの処置を報告した後その指令で離反貴族たちを探しにまたここに戻ってきていることから，王宮とこの城との間は徒歩で往復 1 時間足ら

ず，片道 30 分弱の距離と考えられる．したがって王宮はウェストミンスター・アベイ (Westminster Abbey) であったので，この城はベイナード城 (Baynard's Castle)[14] あるいはその北西にあったモンティフィシェット城 (Montifichet's Castle)[15] と推測することは許されてもいいのではないだろうか．いずれも，テームズ川沿いで，現代の地下鉄ブラックフライヤーズ (Blackfriars) 駅あたりにあったものと思われる．ちなみにこの駅から西へ 3 つ目がウェストミンスター駅である．時間や空間を縦横に行き来し，その整合性に矛盾をきたすことがままあるシェイクスピアにあって，そんな推測自体無意味と言われればそれまでであるが，しかしあえてこう推測することから興味深いことが出てくる．

この辺りで水夫がうろついていてもさして目立つことはないと思われる．それからテームズ川に浮かんでいる適当な船にもぐりこむことも考えられる．アーサー自身が言うように，城壁から無事に飛び降りてしまえば，あとはこの水夫の変装によって「逃げだす方法はいくらでもあるだろう」．このように逃げおおせる見込みは，しかし，アーサー独自の発想ではなく，誰かが彼にこの辺りの地理的位置を教えたうえ変装用衣装を与えた結果出てきたものだろう．それで納得して，アーサーは水夫の服を着て震えるほど高い壁を飛び降り，そして無残にも石畳に激突して死に至ったのである．城壁の外側で水夫の撲殺遺体が発見されても，それは何らかの船員同士のいざこざに巻き込まれた単純な事件として処理されるだろう．

観客は確かにアーサーが逃げそこなって事故死する場面を見せられるが，そう思うのは観客だけで，彼の死は，実は，事故を装った殺人の可能性がある．突き落とされたということではないが，下が硬い石の上に飛び降りれば，確実に死ぬことがわかっている壁をあえて飛び降りるように仕向けられたのではないだろうか．

次にアーサーの遺体の発見のされ方にいくつか疑問点がある．ペンブルック伯，ソールズベリー伯，ビゴット卿の不満貴族三人組と私生児がその遺体を発見するが，なぜ彼らが都合良くこの時間に，この場所にやって来たのか？しかも発見した遺体が王子だとわかって，しかしそれがなぜ水夫の服装なのかに疑問のことばもないのはなぜか？

三人組はこの直前にメルーン伯と会うが，このフランス貴族が持参してきた手紙は，枢機卿からのもので，フランス皇太子のもとに寝返りを誘うものである．不満貴族の動向は恐らくフランス側のスパイ網に捕獲されていたであろうが，王からの決定的な決別の情報を得たこのタイミングで，信頼できる筋を通した密書が，王宮を出てしばらく歩いたこの牢獄でもある城近くで，目立たないよう，彼らに渡されたのであろう．その後遺体発見現場となる城壁の外側に面した路上で，ソールズベリーは，フランス軍が陣を張るセント・エドマンズベリーへ行く腹積もりを明かし，そこまで 2 日の旅になるので明日の朝出発しようと提案している．今は暮れ時かそれほど遅くない夜であると思われる．ベイナード城辺りからイングランド東部サフォーク州のセント・エドマンズベリーまでは，馬で 2 日ぐらいの旅程である．

そしてちょうどそこへ彼らを翻意させて連れ帰るように命じられた私生児が大あわてでやって来る．この私生児は，フランスから帰国後ずっと王の委任を受けてあちこちの修道院に行っては

軍資金を調達して回っていたが，まもなく王が退位すると言うピーターなる預言者をポンフレットで捕えて王の前に連行し，また，フランス軍の上陸や王の扇動によるアーサー殺害のうわさが世間に流布していることや，それに興奮したソールズベリーとビゴットにも会ったことを王に報告していた．ポンフレットはセント・エドマンズベリーよりさらに北に遠い，現代の行政区分で言えばイースト・ミッドランドのリンカーンシャーにあるので，王宮までは馬でも，しかも他所に寄らずまっすぐ旅をしたとして，最低 4〜5 日はかかると思われる．つまり，4〜5 日前には，人々はこの予言で不安に駆られていたのであり，その後の旅路でアーサー殺害のうわさに基づいてその墓捜しまでしている始末である．要するに，アーサーが殺害され，それを契機に民衆だけでなく貴族の中にまで世情不安が起こり，王退位にまでいくという世間のうわさを，私生児はすでにアーサーの転落死以前に耳にしていたのである．

ところで，この少し前のところで，例の三人組が，王からヒューバートの報告によるものとしてアーサー「死亡」を知らされて，決定的に離反を決意して退場する際に，ペンブルックが「このあわれな少年の相続財産，／むりやりに建てた墓ともいうべき小さな王国をさがすとしよう.」(4.2.97－98) と言っていた．先ほどの私生児の情報からすると，以前彼ら三人は，大勢の人々がこのあわれな王子の墓捜しに躍起になっていることに，自らはその行動に加わるかどうかは別にして，「目を火のように真っ赤にして」(4.2.163) いた様子からすると，当然知っていたことになる．さらにペンブルックが，先ほどの引用個所の少し前で，彼の友人がヒューバートから「例の令状を見せられた」(4.2.70) と言っていたが，この令状は，その前の場で明かされていたアーサーの両目を焼き潰して殺害するようヒューバートに指示したものと同じだ考えるのが，観客にとっては自然である．したがって，王の指示によるアーサー謀殺の疑惑は三人の貴族の確信になったと考えられる．そして実際に少年の遺体が発見されて，それは実証された．自殺，他殺，事故死のいずれであれ，高所からの落下で石の上に激突して死んだ場合，死体は無残な姿に違いない．「思ったとおり哀れにもアーサーが殺された」ということが何より重要であって，その殺されたときの服装を問う余裕もないのは蓋然性として理解できる．これは謀殺疑惑を共有していた私生児にも当てはまる．かくして，彼らはアーサーの遺体を発見「させられて」，まさしく王の命令で惨殺されたと思う．不審死として検分することはない．ただし，フランス側への寝返りを決めている三人組と違い，私生児は王には忠誠である．三人は，それぞれここぞとばかりに哀れな死体を前に長々と残虐非道をなじり，復讐を訴えるが，意見を求められた私生児は，わずか 3 行で，次のように慎重に仮定法で述べるだけである．「これがだれか人間の手でおかしたものなら，／それは呪われた血なまぐさい行為，／邪悪な手のおかした無慈悲な犯罪といえますな.」(4.3.57－59)

そんななか，アーサーが生きていることを伝えて三人組を王のもとに連れ戻すべく命令を受けてやってきたヒューバートは，アーサーの無残な遺体を見せられて，三人それぞれから極悪人として散々なじられる．中でもソールズベリーは剣を抜いて突っかからんばかりであるが，しかしここでも，私生児は冷静に事を収める．由緒ある三人の貴族たちの言動に比べ，彼のことばや振

る舞いははるかに威厳のある立派なものである．彼らは，あれほどアーサーの墓を捜しまわり，その無残な遺体に復讐を誓ったにもかかわらず，遺体をそのままにそそくさとその場を立ち去ってフランス軍の陣取るセント・エドマンズベリーへ向かう．アーサーの死は，彼らにとっては，あくまで王に反旗を翻すための口実にすぎない．一方，私生児はヒューバートに遺体を担がせて王宮に向かうが，このことも彼の紳士らしい振る舞いであると同時に，ヒューバートの言い分を信じる根拠を求めた行為であるとも言える．すなわち，これは真犯人に触れられると遺体はあらためて血を流し出すという当時信じられていた判定法[16]に基づいたものである．私生児は，王の命令があっただろうとは思いながらも，アーサーがヒューバートの手で殺害されたとは思っていない．

主君の命令と良心

生きていたときのアーサーは，フランス王にとっては自らの勢力拡大のための大義の象徴であり，ジョン王や皇太后にとっては自らの権威の正当性を確保するために暴力的に除外すべき対象であり，気位の高い母親コンスタンスにとっては未亡人として生きていくための唯一の頼るべき支えとしての存在であった．また「殺害」されたアーサーは，反乱貴族にとってはその行動についての自らを納得させられる理由付けであり，バチカンにとっては神の呪いを振りかざして教会の支配強化を計るための必要な捨石であり，フランス皇太子にとっては侵攻の機会を提供してくれる価値ある材料であった．いずれにしろ，アーサーは何らかの「利益」の手段として利用される存在にすぎなかった．

しかしアーサー自身は，そのような利益を越えてただ生きることを願うが，その生への執着が，迫る死の恐怖の中で極めて豊かな表現力を持っていて，ヒューバートの心を動かした．ヒューバートは，他の貴族たちとは違って，ジョン王には忠実に仕えてきたが，この少年との出会いではじめて王の命令に背いたのである．主君の絶対命令より自己の良心あるいは「死んでいたはずの慈悲心」(4.1.26) に従ったのである．これは暴君に対する造反有理，乱世の下克上の論理，あるいはひょっとしたら社会的関係そのものを転覆する革命の論理になりうるものであろうか？この問題は，エリザベス朝のイングランドにおいて，例えば幾度か襲ってきたペストの流行，アイルランドやスコットランド遠征などによる国土の荒廃や戦費調達のための重税感，諸宗派間の対立抗争など，さまざまなレベルで社会不安が深刻化するなか，大きなテーマとして意識されていたと思われる[17]．しかしシェイクスピアはこの問題に対してかなり慎重なスタンスを取っている．というのも，ヒューバートがジョン王の命令に従わなかったことは，王の残虐非道がなかったことになって皮肉にも王の窮地を救うと思われたが，しかしアーサーが墜死することでヒューバートの善意は無に帰し，王の立場も弱くなるという，非常に微妙なアクション展開が見られるからである．すなわち，家臣が王の気まぐれな意思に背いたが，そのことが少なくとも結果的に一旦は王のためになったのであり，これは根本的な支配構造の転覆にはならない．ちなみにヒューバー

トの友人であるフランス貴族のメルーン伯も，その良心によって主君である皇太子に背いてイングランドの貴族三人の命を救い，結果的に皇太子に浴びせ掛けられるかもしれない残虐非道の誹りをかろうじて防いだ．さらに思い起こせば，一幕一場でやや喜劇的に展開されたフォーコンブリッジ夫人の場合も逆の形でこの問題に関わってくる．彼女は暴君リチャード獅子心王に屈して操を破ってしまったが，その結果生まれた私生児が皮肉にも自分の家族のためになり，さらには救国の最大の貢献者になる．

まとめ

最初私生児はジョン王から「率直な愉快なやつ」(1.1.71) と言われていたが，最終幕になると使者が王に彼のことを「勇敢なお身内フォーコンブリッジ様」(5.3.5) と呼び，王が臨終の間際に彼に「甥か，おまえはおれの目を閉ざすためにきてくれたのだ．」(5.7.51) と呼びかけて息を引き取る．それぞれ原文の英語では 'fellow' から 'kinsman' となり 'cousin' へと呼び方が変化して，最後に彼は王にとって最も信頼できる身内と成ることがわかる．そして王子をはじめ貴族一同，非業の死を遂げた王の遺体を前に，悲嘆に暮れるなか，私生児が，再びイングランドが内部から混乱して破滅に陥ることの無いよう警告して，この劇を終える台詞を述べる．

ああ，いま流すのは必要な涙だけにしましょう，
これまで，われわれの悲嘆の種は十分あったのですから．
わがイングランドは，最初にみずからの手でみずからを
傷つけぬかぎり，傲慢な征服者の足もとにひれ伏すことなど
かつてなかったし，これからも断じてないでしょう．
こうして貴族諸卿がふたたび祖国にもどってきたからには，
たとえ全世界が三方から攻めてこようとびくともしません．
もはやわれわれを悲しませるものはなに一つないでしょう，
イングランドがおのれ自身にたいして忠実である以上．　(5.7.110－118)

これまでウィットに富むことばと自嘲によってたくましく生き抜いてきて，今や唯一の英雄と言える人物のこの台詞は 1580 年代から 1590 年代末にかけてのエリザベス朝イングランドの時代状況について，すなわち，同時代の観客にとっては決して他人事ではないなおも不安な時代状況についてあらためて意識させると同時に，その不安を克服すべきある種の理想的な国家・社会的有機性の必要性を訴えている．これは有力貴族が二派に分かれて争ったばら戦争（1455－1485）を経てチューダー朝成立に至る過程を，混沌から秩序回復のそれとして描く，いわゆるチューダー神話などの体制イデオロギーに合致するだろう．

しかしこの愛国的な台詞が劇の流れの中に置かれると必ずしも大きな説得力を持つとは言えな

い．確かに私生児は，戦場では勇猛果敢に奮闘してリーダーシップを発揮する英雄であり，またアーサーの遺体発見現場での貴族たちやヒューバートとのやり取りで見られたように，冷静な判断力も持ち合わせた人物である．しかし王の命令で修道院から財産没収の任務に就くよう全権を委任されると，「金貨銀貨がお呼びなら，鐘と聖書と蝋燭が／破門するぞとおどしたって，あとには引きません．」(3.2.22－23) と言って，いわば現場で憎まれる汚れ役を忠実にこなしており，そんな彼が訴えることばに常套的な劇の締めくくり以上の意味を求めるのは困難かもしれない．現場優先できたツケとして，フランス皇太子の軍勢がすでに撤退を開始しているという最新情報に疎いこともこの直前に暴露されている．

前半のアンジェ市攻略をめぐる英仏間の争いで情勢が二転三転，さらに四転までするなか，微妙な立場に追い込まれたブランシュが，そのジレンマについて，「どちらが勝とうと，私はその勝ったほうで敗れるのです」(3.1.335)，「私の幸運が生きるところで，私のいのちは死ぬのです」(3.1.338) などと述べていた．何事にも表と裏があり，またそれが対立しているように見えていて実は必ずしも対立しているものでもなく，時に入れ替わったり，同じになったりといったように，シェイクスピアにかかると単純な二項対立は常に崩されていく．このことはさらに一層後半のアクションや人物像において展開される．上述した私生児の場合以外にも多くの人物がこの枠の中にいる．

死と直面したアーサーの生への執着はどんな人間の心にも響くほど並外れて強いものであるが，その最後の仕上げとして飛翔して降り立った地点はあっけない死であった．彼の生と死はいったい何だったのか？

皇太子が策におぼれてイングランド貴族の心情を踏みにじる行為が，結果的にはそのことで自身も裏切られることになり，また，アルマダの再来のようなグッドウィンの砂州での援軍の難破，沈没という思いがけない天の采配も災いして，イングランドから撤退を余儀なくされてしまい，枢機卿を通して和睦の申し入れをせざるを得なくなる．彼の野心が行き着いた先はいったい何だったのか？

一方，謀反を起こした貴族たちは，フランス貴族でありながらヒューバートと友情で結ばれているメルーン伯の死に際の告白で皇太子の企みを知り，あれほど不満の根源のように，しかし失政の具体的な指摘はあいまいなままに，彼らが批難していたジョン王のもとに戻って忠勤を誓うことになる．しかし，そのジョン王はすでに重い熱病のため戦線離脱し，指揮権は私生児に委ねられている．そしてまもなく王は療養先の修道士がもった毒によって落命することになる．彼らは結局何のために謀反を起こしたのか？

しかも，ジョン王は，あれほど強固にローマに挑んでいたのに状況不利と見ると簡単に枢機卿に泣きを入れ，フランス側との和睦の斡旋を彼に依頼し，私生児の叱咤ですぐにそれを撤回する始末である．国王と教会との関係はいったいどうあるべきなのか？王の最期の耳には，リンカーンの浅瀬でイングランド軍の大半がフランス軍同様思いがけない激流にさらわれてしまったという報告がなされ，それに返答する余裕もなく逝ってしまう．この戦い全体にいったい何の意味が

あったのか？

枢機卿のパンダルフは，それまで皇太子を誘惑して巧みな策士ぶりを発揮していたのに，終幕では単なる使い走りのように英仏両軍からその存在価値が侮られる．そして，両軍それぞれ思いがけず自然の力で主力部隊が失われたおかげで戦闘不能に陥ってしまった結果として，形だけの斡旋役を引き受けることになる．ローマが振りかざす神の呪い，破門とはいったいどういう意味があるのか？

シェイクスピアは，ジョン王の乱世をエリザベス朝イングランドにかぶせながら，二項対立の枠組を壊すような作劇法を用いてこのような疑問をわれわれに投げかけ，私生児が批判し続けた「利益」を乗り越える普遍的価値の模索を求める．

注

⑴　一般的にはホリンシェッドの『年代記』と呼ばれ，初版刊行は 1577 年であるが，1587 年に第 2 版として改訂増補された．シェイクスピアが依拠したのはこの第 2 版である．

⑵　cf. "Introduction" to *King John* edited by E. A. **J**. Honigmann, The Arden Shakespeare, Methen & Co., 1967, (reprinted 1986) p. xxvi

⑶　批評家の間で別れる「難問は『乱世』がシェイクスピアの『ジョン王』のソースなのか，あるいは『ジョン王』が『乱世』のソースなのか」("Appendix: Date, Source, and The Troublesome Reign" of *King John* edited by L. A. Beaurline, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1990, p. 194）ということである．

⑷　NHK シェークスピア劇場『ジョン王』，NHK サービスセンター，1986 年，脚注参照．

⑸　参考にした小田島訳では 1 行短くなっている．

⑹　"commodity" の日本語訳は他にも「都合」，「便利」，「便宜」など有りうるが，参照した小田島訳に従い，「利益」とした．

⑺　例えばリチャード二世から王位を簒奪したヘンリー四世の「原罪」にはじまり，ばら戦争という「罰」を経て，チューダー朝成立に至るという，いわゆるチューダー神話．

⑻　162，ⅰ, cf. Appendices of *King John* edited by E. A. **J**. Honigmann, op. cit., p. 152

⑼　同様な羊飼いの生活への夢想は権力者としては不適格なヘンリー六世が戦場で一人になって述べる台詞の中にもある．(『ヘンリー六世・第 3 部，二幕五場』)

⑽　NHK シェークスピア劇場『ジョン王』，前掲書，脚注参照．

⑾　史実上は 16 歳．

⑿　165，ⅰ.ⅱ, cf. Appendices of *King John* edited by E. A. **J**. Honigmann, op. cit., pp. 153-4

⒀　165，ⅱ, cf. ibid. p. 154

⒁　後に僧院となり，さらにシェイクスピアゆかりのブラックフライヤーズ劇場となる．

⒂　アーサー死亡と同年の 1213 年にジョン王により破壊される．

⒃　NHK シェークスピア劇場『ジョン王』，前掲書，脚注参照．

⒄　神の戒律に背く暴君を家臣が倒すことが許されるかどうかという問題を巡って賛成の立場の聖アウグスティヌスやエラスムスと反対の立場のモンテーニュなどの議論も背景に考えられる．cf. *King John* edited by L. A. Beaurline, p. 50

尚，『ジョン王』からの引用部分は新ケンブリッジ版 *King John*（The New Cambridge Shakespeare, 1990）を使用し，その日本語訳は小田島雄志訳『シェイクスピア全集・第VI巻（白水社，1979 年）を参考にした．